

もくじ

▽ご挨拶 2016	1
▽大会案内	2
▽研究室紹介	3
▽研究部会レポート	5
▽奨励発表会報告	6
▽ from Editors	7

ご挨拶 2016

日本生理人類学会会長
勝浦哲夫(千葉大学)

本年も2ヶ月が過ぎ、新しい年度を迎えようとする今日この頃ですが、会員皆様にとって本年も良い年になりますことを心より願っています。本年も宜しくお願い申し上げます。

さて、昨年は3月14～16日に「ヒトの環境適応と全身的協関に関する国際シンポジウム」が古賀俊策先生(神戸芸術工科大学)、近藤徳彦先生(神戸大学)のお世話により神戸大学発達科学部で開催されました。本シンポジウムは科研費研究成果公開發表(C)の支援を受け開催されたものですが、海外から16名の著名な研究者を招聘し、9つの口演セッションとポスターセッションが行われました。口演セッションでは1演題当たり30分程の時間があり、非常に濃密な発表と質疑が行われました。ここでの国際的な研究交流はICPA2015につながり、今後の生理人類学の国際的な発展に大いに資するものと思います。

5月30～31日に北海道大学医学部学友会館で山内太郎大会長の下に第72回大会が開催されました。北海道大学で本大会が開催されたのは今回でなんと5回目となります。九州芸術工科大学(現九州大学芸術工学部)、大阪市立大学と並び最多の開催回数になります。本大会ではゴリラ研究の第一人者である山極壽一先生(京都大学総長)による特別講演「家族の由来と未来—ゴリラの社会から考える」があり、ゴリラとヒトの生活史を比較することでヒトの特徴を鮮やかに示して戴きました。総長という立場で大変お忙しい中、ご講

演戴きましたことは本学会としても大変光栄なことでした。シンポジウムI「狩猟採集民の人類学」(司会：安河内朗先生)は人類学研究交流会としての企画であり、生理人類学、形質人類学、人類集団遺伝学、生態人類学の各領域で活躍中の先生方より興味深いお話を戴きました。また、シンポジウムII「代謝機能からみた全身的協関と適応能」(司会：前田享史先生)では若手研究者の先生方よりお話を戴き、活発な議論が交わされました。この他、本大会ではポスター発表、一般講演を合わせて57演題の発表があり、研究交流の場として盛況の中開催されました。また、懇親会は天使病院の天使ホールに会場を移し、心温まるおもてなしを戴き、北海道の美味しいものを堪能致しました。大会の詳細はPANews, Vol. 25, No. 3の大会報告をご覧ください。山内大会長始め、前田享史副大会長、佐藤香苗実行委員長、実行委員の先生方に改めて感謝申し上げます。

また、10月27～30日には、第12回国際生理人類学会議(ICPA2015)が東京ベイ幕張ホール(千葉市)で開催されました。特別講演を戴いたSemir Zeki先生を始めとして海外16ヶ国からの参加者も含め180名(うち外国人55名)ほどの参加を戴き、生理人類学の発展にとって意義のある国際会議になったものと思います。本国際会議も科研費研究成果公開發表(C)のご支援を戴きました。詳細につきましては、PANews, Vol. 25, No. 4の開催報告をご覧ください。次回のICPAは2017年9月12～15日にBarry Bogin会議長の下に英国のラフボロー大学で開催される予定です。

このICPA2015開催中に国際時實生理人類学賞の授賞式が行われ、国際生理人類学連合(ISPA；

現 IAPA)の初代会長であり、1994年に第2回国際生理人類学会議(Kiel, ドイツ)の会議長を務められた Hans W. Jürgens 先生(Kiel 大学客員教授)に賞状とトロフィーが授与されました。この会場に第1回国際時實生理人類学賞の受賞者である当学会前会長の佐藤方彦先生が急遽ご参加下さいましたことは大変うれしいことでした。

昨年は、この他、1月に待望の本学会編「人間科学の百科事典」(丸善出版)が刊行されました。売れ行きも好評とのことで構想から2年半を費やした苦勞が報われたものと思います。また、2月には前副会長の菊池安行先生の瑞宝章受賞記念講演会・祝賀会が学士会館で開催されました。本学会会員のみならず、他学会会員、千葉大学・武蔵野大学卒業生など多数がお祝いに駆けつけて下さいました。

9月7～8日には前田享史先生、若林斉先生他のお世話で恒例になりました2015年度夏期セミナーが関西セミナーハウス(京都)で開催されました。近赤外線分光計測法の講習会、若手の会企画、岩永光一先生と深沢太香子先生の特別講演、体温調節部会と照明研究部会の講演など盛り沢山の企画がありました。例年通り多数の学生が参加し、若手研究者の交流の場として意義深いものとなりました。

10月11日には日本民俗学会主催の人類学関連学会協議会合同シンポジウム「群れる・集う ―人間社会の原点を問う―」(日本生理人類学会シンポジスト:元村祐貴先生)が関西学院大学で開催されました。

英文誌 JPA のインパクトファクターも一昨年の1.16から1.27に向上し、海外からの投稿も増加しました。本学会の国際的な研究交流も一層盛んになった1年でした。

一方、大変悲しいできともありました。前副会長の菊池安行先生が病氣療養中のところ10月4日に逝去されました。菊池安行先生は佐藤方彦先生と共に本学会を設立し、その発展に多大な貢献をされました。お通夜、告別式に多くの学会関係者、教え子たちが参列し、先生の交友の広さ、深さを感じました。改めてご冥福をお祈り申し上げます。

さて、本年は、6月4～5日には岡田明大会長の下に第73回大会が大阪市立大学で開催されます。大阪市立大学での開催は6回目となり、大

学別開催回数の最多記録になります。今回も多くのご参加があるものと期待しております。また、10月22～23日には金沢市の石川県文教会館で第74回大会が小林宏光大会長(石川県立看護大学)の下で開催されます。秋の金沢は観光シーズン真っ只中です。お早めに宿の確保をお勧め致します。

本年も、平成30年度公募からの科研費分科細目表の大幅な見直しを見据えた生理人類学研究の一層の深化、若手研究者への研究支援、英文誌の国際情報発信力強化など、会員皆様の研究活動のお役に立てるように各担当理事と共に学会運営をしていきたいと考えております。会員皆様のご協力、ご支援を宜しくお願い申し上げます。

【大会案内】

第73回大会のご案内(第2報)

大会長 岡田 明
(大阪市立大学)

第73回大会を、大阪市立大学にて下記の要領で開催いたします。

今回の大会の開催主体が本学生活科学部であることもあり、生活の中の生理人類学を視点とした企画を進めております。

まず特別講演では、今後の生活の中で問われる人間とロボットとの共存を考えることに焦点をあて、「人間とは何か」という基本問題と向き合いながら人間型ロボットの研究開発を行っている大阪大学の石黒浩教授をお招きすることになりました。またシンポジウムでは、「健康と生活科学」をテーマに準備を進めております。

多くの皆さまのご参加を心よりお待ちしております。詳細につきましては、学会ホームページなどで随時お知らせする予定です(2月中に発信開始)。たくさんの会員の皆様と大阪でお目にかかれることを心より楽しみにいたしております。ぜひ、ふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。



大阪市立大学学術情報総合センター(会場)

1. 会期：2015年6月4日(土)・5日(日)
(理事会および若手の会は6月3日(金)を予定しております。)
2. 会場：大阪市立大学杉本キャンパス 学術情報総合センター
〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
<http://www.osaka-cu.ac.jp>
(天王寺からJR 阪和線各駅停車で約15分、杉本町駅下車徒歩5分)
3. スケジュール(予定*)
 - 4(土) 午前：一般発表①(口頭, ポスター)
昼休：評議員会
午後：一般発表②
特別講演
テーマ「人間とロボット(仮)」
講師：石黒 浩(大阪大学教授)
夕刻：懇親会
 - 5(日) 午前：一般発表③
昼休：総会, 各種委員会
午後：シンポジウム
「健康と生活科学(仮)」
一般発表④

会期中：機器展示

(* 各プログラムの時間については変更の可能性もあります)

4. 参加・発表申し込み等日程・方法
 - ・事前参加申込：2月末頃からご案内予定
 - ・演題申込締切：3月末⁺
 - ・抄録提出締切：4月末⁺
5. 参加費
 - <大会>
 - ・正会員：¥8,000(事前⁺) / ¥9,000(当日)
 - ・非会員：¥10,000(事前⁺) / ¥10,000(当日)
 - ・学生会員：¥3,000(事前⁺) / ¥4,000(当日)
 - ・学生非会員：¥4,000(事前⁺) / ¥5,000(当日)
 - <懇親会>
 - ・正会員：¥3,000
 - ・非会員：¥4,000
 - ・学生：¥1,000

(⁺ 期日については最新の案内をご確認ください)

※学会ホームページ, PANews, 学会メール等にて2月から順次ご案内いたします。

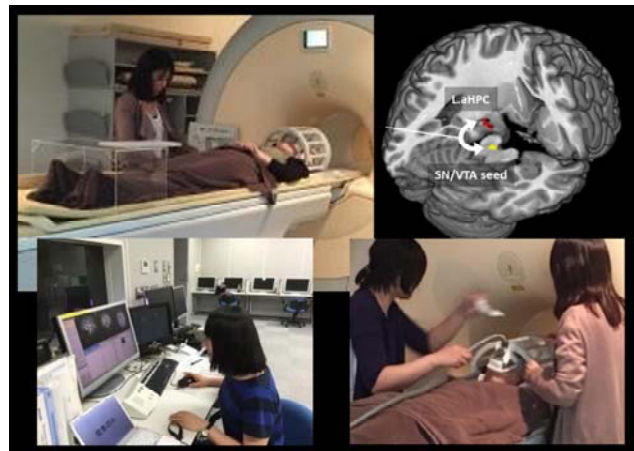
大会事務局(問合せ先)

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
大阪市立大学大学院生活科学研究科
日本生理人類学会第73回大会事務局
E-mail: jspa73osaka@jspa-net.sakura.ne.jp
TEL&FAX: 06-6605-2823, 2855

【研究室紹介】

首都大学東京脳機能解析科学研究所

菊池吉晃(首都大学東京)



僕の研究室は、首都大学東京の荒川キャンパスにあります。生理人類学会第67回大会でいらっしやった方々には少しは馴染みがあると思いますが、このキャンパスは町屋から都電で数分のとても静かな場所にあります。僕が初めてこの大学(当時は、東京都立保健科学大学といいました)に就職面接のために訪れた際、「おや、こんなところに素敵な公園が…」と思ったら、なんとそこがその大学だったので、まだ採用もされていないのになんだかウキウキしたことを今でも覚えています。

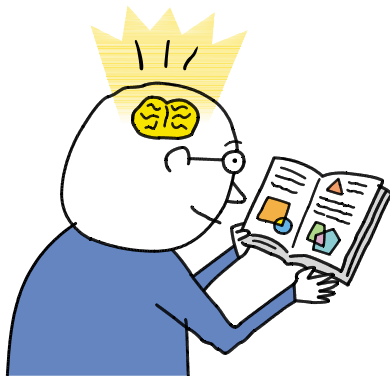
僕の研究室は小所帯なので規模は小さいですが、幸いなことに、大学には3テスラのMRI装置(Phillips社)が置いてあります。このMRI装置は共用設備ではありますが、特に臨床のためのものではないので、使い勝手が結構良いのが「売り」です。また、操作室スペースは、大体どこへ行っても「狭いなあ、これじゃあ実験しにくいよなあ〜」という印象を持つのですが、ここのスペースは壁際にPCデスクを20台以上も置けるととても贅沢な作りになっています。

僕は、東京都立保健科学大学(現在の首都大学)に異動する前までは、東京医科歯科大学の難治疾患研究所で脳波や脳磁場を用いて主に認知の脳機能研究をしてきましたが、ここに異動してきてからは、もっぱら機能的磁気共鳴画像法(fMRI: functional magnetic resonance imaging)を用いた脳研究に勤しむようになりました。fMRIは、とても信頼できる脳機能計測法である上に、人間の脳の意識上の世界はもちろんのこと、意識下の世界

までしっかりと観ることができます。実際、わたしたちは、自分自身がちゃんと意識して自分の行動をいつでも決めていくつもりになって暮らしていますが、その行動発現のタネの多くは脳の中の無意識の世界で生まれています。そんな風に考えると、人間の脳あるいは人間そのもののもっとも深いコアをどうしても知りたいと思うようになりました。

そんなわけで、今は「人間性の神経基盤とは？」というのがもっぱらの僕の研究テーマとなっています。たとえば「母性愛」は、その中でも人類普遍の大テーマですが、則内まどかさん(現在、首都大学客員教授)は大胆にもこれを自身の学位論文のテーマとして研究しました。その成果は見事に開花し *Biological Psychiatry* 誌に掲載され、すでに多くの論文や書籍などで引用不可欠な論文となっています。これに続き、「自尊心」や「身体不安定性」に関する研究(いずれも *PLoS ONE* 誌)、最近では「ノスタルジア」に関する研究(*Social Cognitive and Affective Neuroscience* 誌)など、これらはすべてここで生み出された学位論文ですが、いずれも「人間性」を理解する上でとても貴重な研究成果となっていることを誇りに思っています。

最近では、「芸術」、「宗教」、「経済」などの必然性やその存在意義について、脳の仕組みから理解しようとしていたりしています。毎日マスメディアで報道される目を覆わんばかりの悲惨な事件は、本来備わっていたはずの人間性の喪失を実感させます。科学は、そして、脳科学も、「正しい」人間の在り方を追及し、人類を少しでも「正しい」方向に導くというところにその存在意義があることを確信していきたい…最近の僕は、そう思っています。



千葉大学人間生活工学研究室

下村義弘(千葉大学)

本研究室は1979年に故菊池安行先生によって、工業デザイン領域における日本で最初の人間工学研究室として設立されました。そして勝浦哲夫先生、岡田明先生、原田一先生、岩永光一先生ら生理人類学の重鎮の先生方のもとで発展し、36年経ちました。人間工学を示す *Ergonomics* は仕事(*Ergon*)の法則(*nomos*)を示しますが、デザインをとりまく情勢と研究室の目指すべき姿勢から、現在は *Human* の *nomos* である *Humanomics* (人間生活工学)の名を冠しています。これまでに五百数十編を超える卒業論文と修士論文、博士論文を輩出してきました。設立当初から続く本研究室の姿勢は以下の4つの特徴に表れており、これらは今後も続き、益々重要になってくるものと考えています。

①ヒトの生理学的測定を多面的に行うこと

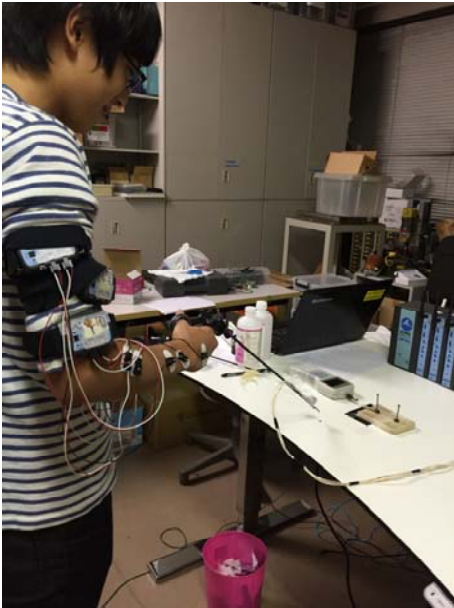
筋電図、骨格運動、脳波、事象関連電位、瞳孔径、心電図、血圧、呼吸代謝、体温、皮膚電気反応、各種感覚計測など、どのような実験でも常に複数の指標で検討します。全身的視点でヒトを眺め、近年では行動特性や性格特性も含めて、より実質的な方法論を心がけています。

②基礎研究に基づいて製品や人工環境の評価と開発を行うこと

例えば持ちやすいデザインなら筋負担の大きさのみならず共収縮や筋紡錘の特性に基づいて説明したり、光環境なら照度や色温度のみならず ipRGC による非視覚的作用の特性に踏み込んで LED の制御方法を提案したりします。あ



錐体と ipRGC による非視覚的作用の実験風景



医療用器具のデザイン

くまでも自然環境に適応してきた"ヒト"を、考察の要としています。

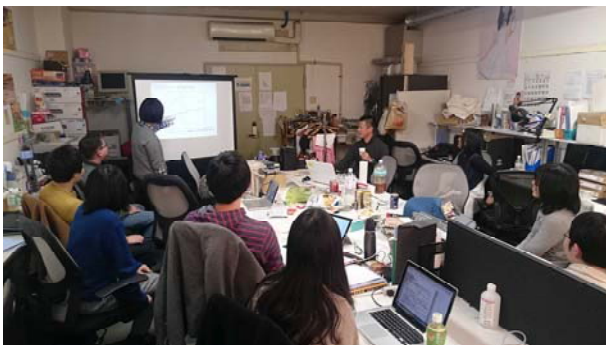
③企業や学内との共同研究が多いこと

家電、自動車、医療機器、日用消費財、インフラ関連など、例年 5 ~ 10 件ほどの共同研究のオファーをいただいています。千葉大学内ではフロンティア医工学センターや他の工学系研究室との共同研究も盛んです。

④留学生が多いこと

千葉大学内でデザイン系は非常に高い比率で留学生が在籍しています。よいデザインを考えるには、ヒトとは何か？を常に考える必要があります。日常的に国籍を越えた研究環境は、学生にとってとてもよい刺激となっています。

このような特徴を持つ研究室ですが、日常はだいぶ和やかといえます。工学部には桜と樺の並木通りがあって気分転換でき、研究室ではしばしばパーティや夏合宿をします。現在は学部 3 年生から博士まで 26 名、研究員 3 名、秘書 1 名、教授 1



国際誌の論文抄読や各自の研究発表を行うゼミ

名での運営です。博士後期課程はみな社会人学生です。近年は男女比がおおよそ 1:1 となっており、学生に恵まれた人員構成となっています。人工気象室、調光照明実験室、防音シールドルーム、ミストサウナつき入浴実験室を有し、無線生理アンブ群、血圧や眼球運動、呼気ガスなどの連続測定システムのほか、3 次元動作測定器や脊柱長測定用高精度スタジオメータ、分光放射照度計などの設備があります。

研究テーマは、応用的にはハンドツールから自動車、家電製品、手術支援機器などの製品デザイン、人工照明や浴室などの環境デザインがあります。基礎的には、光の非視覚的作用、運動計画としてのアフォーダンスや筋制御方法、精神的集中や情動反応、周辺視特性といったヒトの特性を明らかにするものがあります。学生のテーマの決め方は、オリジナルであったり、共同研究に参画したり、先輩から引き継いだりと、教員と協同しながらみな楽しくやっています。

自由なテーマの中で、学生は毎年学会発表や論文発表を意欲的にこなし、受賞歴も豊富です。これからも本研究室は、初心を忘れず、宝である学生とともに歩いていく所存です。

【研究部会レポート】

視覚学会若手の会との合同セッション報告
ならびに視覚学会 2016 年冬季大会参加報告

小崎智照(九州大学)

2016 年 1 月 21 日に本学会照明研究部会と視覚学会若手の会との合同セッションを視覚学会 2016 年冬季大会中に開催致しましたので、その合同セッションならびに視覚学会 2016 年冬季大会について報告いたします。今回の合同セッションでは照明研究部会から 3 名、視覚学会若手の会から 3 名、計 6 名による研究紹介が行われました。

各発表者と題目は以下の通りです。

○生理人類学会照明研究部会

高橋良香先生(京都大学)「瞳孔対光反射の分光感度へのメラノプシンを含む網膜神経節細胞(ipRGC)の寄与」

北村真吾先生(国立精神・神経医療研究センター)「視覚障害のない概日リズム睡眠障害(非

同調型)患者にみられる生物時計異常」

李相逸先生(九州大学大学院)「色光に対する非視覚的作用と心理的作用の関係」

○視覚学会若手の会

楊嘉楽先生(中央大学)「乳児における前-恒常性視覚(pre-constancy vision)の検討」

澤山正貴先生(NTT コミュニケーション科学基礎研究所)「透過率の空間的な不均質さを手がかりとして生じる透明面の質感知覚」

佐藤弘美先生(東京大学大学院)「コントラストぼけの知覚における輝度極性の意義」

我々照明研究部会はヒトに適した照明(光環境)についてヒトの生理的側面に着目し、研究を行っておりますが、照明による心理的側面への作用(例えば快適性や明視性、演色性)も考慮しなければなりません。そういった意味で、ヒトの視覚特性について知る機会を得た今回の合同セッションは本研究部会にとって大変有意義なものであったと思います。

また、合同セッションと同日には、光による生理的作用について世界的に著名な Mark Rea 先生(米国 Lightning Research Center)の特別講演「Circadian light: Translating research from the lab and the field to lighting practice」が行われ、最新の研究成果を拝見することができました。さらに、本学会会員である太田英伸先生(国立精神・神経医療研究センター)による特別講演「視覚環境から考えた赤ちゃんにやさしいケア」と樋口重和先生(九州大学大学院)や野口公喜先生(パナソニック株式会社)、それに私がシンポジストを務めたシンポジウム「光環境の人への影響」も行われ、本研究部会に係りの深い先生方の研究成果を視覚学会の先生方へアピールできたと思います。また、これらのセッションにはこれまで視覚学会に参加したことのない本学会会員の方も参加され、今後の学会間交流が深まるきっかけになったのではないかと思います。このような活動を今後も継続し、真にヒトへ適した照明・光環境の実現に貢献したいと思います。



【奨励発表会報告】

Current Topics in Physiological Anthropology

(2015 年度研究奨励発表会(関東地区)傍聴記)

吉田尚央(千葉大学)



学生が発表中の会場
学生間の議論が活発に行われました

毎年恒例となりました研究奨励発表会ですが、関東地区では 2015 年 12 月 19 日に千葉工業大学津田沼キャンパスで開催されました。今回は学生 25 名を含む 38 名の方が参加され、千葉大学、静岡大学、京都大学、実践女子大学の学生による 19 件の演題がありました。開会の際に、副会長の岩永先生より学生間での積極的な議論を応援するお言葉を頂きました。学生もはじめこそ遠慮がちなもの、すぐに学生同士での質問を多く挙げるようになり、活発な議論が行われました。

今年発表された研究のテーマは、筋活動や知覚心理のような基礎的な研究から労働現場への応用まで、幅広く集まっておりました。研究奨励賞は、示指の緻功性を筋活動から検討された志村恵さん、注意の持続と性格特性の関連性について研究をされた石黒恵子さん、自己の学習状態の判断の正確性についての研究をされた福田菜月さん、看護師の夜勤後の仮眠が認知パフォーマンスへ与える影響を評価された大澤まどかさんの 4 名が受賞されました。他の皆さんの発表も、それぞれの着眼点がユニークな興味深い研究ばかりでした。

発表会終了後は、懇親会の会場であるキャンパス内の展望ラウンジに移動しました。広い視界で夕焼けを背景にした富士山を望むことができ、多くの方が写真に収めておりました。また、会場はゆったりとした落ち着きのある空間で、参加され

た皆さんもリラックスされた様子で話が弾み大いに盛り上がっておりました。

研究奨励発表会は、大学や研究室の枠を超えつつも、学会の本大会よりも学生が参加しやすい貴重な機会であると感じております。今後も益々盛り上がることを願っております。最後になりましたが、今回事務局として運営にご尽力いただきました若林先生に感謝申し上げます。誠にありがとうございました。また、掲載された写真は下村先生よりご提供いただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

from Editors

次号 No.2 の原稿締切は 2016 年 4 月 30 日です

▽寒い日が続いておりますが、年明けから九州地区研究奨励発表会、照明研究部会など熱い論議が各地で行われています。私も 2 月上旬に人類学若手の会（第 4 回総合研究集会 於・九大大橋キャンパス）に参加してきました。この会は、遺伝、形質、進化、民族、考古、心理、生理、文化、霊長類などに関わる研究者の交流集会で、発足から既に 4 年が経過しているとのことでした。口演、ポスター共に活発な質疑応答が繰り広げられ、引き続いて行われた懇親会でも熱いアカデミック論議に花が咲きました。2016 年

度も大阪市立大学で開催される 73 回大会を皮切りに、各地で関連部会などが行われる予定です。ご所属の学生さんは勿論、近隣分野の研究者とお誘い合わせの上、これらのイベントに御参集頂けますと幸いです。（安陪）

▽今号冒頭では、本学会の昨年の出来事と今年の予定を勝浦会長に紹介いただきました。いやまあ沢山あるなあと、驚きました。中盤には 2 つの研究室紹介を掲載しました。大学院生や研究員の募集を考えていらっしゃる研究室代表の方、あるいは、進学先やポスドク先を物色中の学生の方。PANews をどうぞご活用ください。今号最後の記事「奨励発表会報告」は千葉大学の学生・吉田さんにご寄稿いただきました。PANews では、国内外で開催された研究集会等の参加記を、できるだけ若い会員に執筆をお願いしております。論文とは毛色の異なる“科学的文章”を書くよい機会になりますし、また、本誌は ISSN(国際標準逐次刊行物番号)の付いた定期刊行物ですので、そこに掲載された記事はいわゆる「その他」分類の実績にもなります。積極的なご寄稿をよろしく願いいたします。（仲村）

▽ PANews 編集事務局

安陪大治郎 九州産業大学 健康・スポーツ科学センター
仲村 匡司 京都大学大学院 農学研究科
メールアドレス panews@jspa.net
※原稿、お問い合わせなどはこのメールアドレス宛にお送りください。